

書評

地域医療再生のための処方箋

松村 理司 編著

『地域医療は再生する

—病院総合医の可能性とその教育・研修—

〔評者〕 堺 常雄

日本病院会 会長／聖隷浜松病院 院長

私が勤務する聖隷浜松病院では、過去 10 数年の間に各科の専門分化が進み、診療の内容も高度化し、先進的な医療にも対応ができてきた。それにもかかわらず、数年前から現在の診療体制はこれでよいのだろうかという漠然とした疑問が浮かんできている。例えば、救急の場面で専門医が呼ばれ、「これはうちではないよ」という事例を散見するようになったからである。彼(彼女)自身からすればその通りなのかもしれないが、困るのは患者、看護師、初期対応の医師である。この時点では、診療プロセスの中で何ら問題が解決されていないのである。このような状況を改善し、診療の基礎となる部門の充実と総合的な診療の質の保証を目指して考えたのが「診療部門 3 階建」構想である。1 階部分が総合診療内科と救急科よりなる General Medicine(総合診療部門)、2 階部分が Specialties(専門各科)、3 階部分が Super-specialties という構造である。縦、横の連携の充実が図れればと願っている。まだ完成してはいないがこれから 1~2 年のうちに構築しようと考えている。

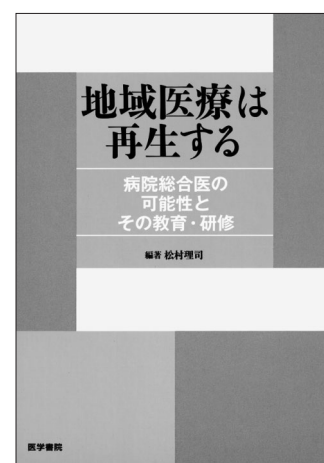
このような考えを持っている時に読んだのが、本書『地域医療は再生する—病院総合医の可能性とその教育・研修』であり、まさに目から鱗が落ちた感じであった。この本は松村理司先生の 36 年にわたる経験をもとに書かれたもので、現場の医療を知り尽くしたうえで地域医療再生のための処方箋を示されたものである。医療者が医療崩壊などと言っている場合ではなく、現場から医療を再構築しようという熱い心が込められ、しかも実現可能な提言である。

「Ⅰ 市立舞鶴市民病院辞職のてんまつ」から「Ⅵ 洛和会音羽病院の医局と総合診療科」までは松村先生がご自分の経験、具体的な提言を述べられ、「Ⅶ いくつかの地域病院における総合診療」から「Ⅸ 教育研

究をめぐる」は松村門下の先生が現場からの考えを述べられている。ここで感心したのは日常診療の忙しい中で、臨床研究、教育研究の重要性に言及されていることである。普通ならば「そんなことは無理」との一言で無視されそうな、しかしながら大切な点にふれていただき、まさにその通りと思った。研究心を失ったら進歩はおぼつかないのである。最後の「Ⅹ」では松村先生が「展望」を担当され、管理者の目で日本の医療全般の問題点について独自の考えを述べておられる。

「医療崩壊」が言われ、病院の勤務医は疲れ切っている。すべてを政治のせいにするのは簡単であるが、現在の政治状況を考えると、残念ながら明るい展望は描けない。それではそのままではいかと言えそうではなく、医療に携わる 1 人ひとりが自分にできることを実直に行っていく必要があるだろう。「誰かがやってくれる」ではなくて「自分たちがやらなければ何も起こらない」のである。

その意味で本書は読者に何をやるべきかを示し、夢と希望を与えてくれるものとなっており、すべての医療人必読の書と言える。多くの読者がこの本から刺激を受け、自分のやるべき方向性を見出し、さらに前進することを切に願うものである。



A5 頁 304 2010 年

定価 2,940 円(本体 2,800 円+税 5%)

ISBN978-4-260-01054-2 医学書院刊